

## ソーシャルワーク教育におけるコンピテンスの獲得とその評価方法

徳山大学 氏名 井上 浩 (会員番号 2450)

キーワード：コンピテンシ基盤型教育、越境的協働性、評価

## 1. 研究目的

アメリカの Council on Social Work Education (以下、CSWE と表記) は 2008 年より、competency-based の教育方法を採用している。CSWE が採用している Education Policy and Accreditation Standards (以下、EPAS と表記) 2008 年度版は、ソーシャルワーク教育に competency-based の教育方針が盛り込まれ、2015 年版の EPAS では、“holistic competency” という概念が採用されている。Competency は一つひとつの教科内容の伝達ではなく、教育の結果だと見なされており、卒業時に「何を学んだのか」ではなく、「何ができるようになったのか」に重点がおかれている。

わが国ではソーシャルワーク教育にコンピテンシーを取り入れようとする動きは少しずつ増えてきているが、コンピテンシーやコンピテンスの概念については十分説明されているわけではない。また、評価についても、コンピテンシーを細分化し、論じようとしている。評価で必要なことは、学生による行為の全体性である。そのため、わが国では評価という点においても、いまだ十分というわけではない。

本報告では、上記のような問題提起に基づき、その目的をわが国におけるソーシャルワーク分野のコンピテンシ基盤型教育 (competency-based education) の方向性と、その評価方法について明らかにすることにおく。

## 2. 研究の視点および方法

まず、コンピテンシ概念について整理する。その際、コンピテンシが重層的な構造を成している点に注目する。コンピテンシ概念を整理した後に、コンピテンシを評価する方法について考察する。本報告の研究方法は、文献研究を通じて行われている。

## 3. 倫理的配慮

本報告はその方法が文献研究に依拠しているが、同時に日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき配慮している。

## 4. 研究結果

コンピテンシ概念を理解するためには、重層的な理解が必要である。重層的という意味は、他職種にも共通するメタ・コンピテンシと、ソーシャルワーカーの独自性が反映されたコア・コンピテンシが含まれているということである。ソーシャルワーカーは単に面接が上手くできる、とかアセスメントが的確である、とかといった以外にも、それを他者と

共有し、分析し、問題解決能力が求められている。ソーシャルワーカーは、越境的協働性も持ち合わせなければならない。この概念は、ソーシャルワークの範囲を保ちつつ、多職種と協働関係を作っていく際、多職種がどのような専門性を持ち合わせているのかということを理解し、その有効性を認めながら、多職種とどのようにしてつながりを構築したり、保ったりしていくかということである。こうした能力が、メタ・コンピテンスである。このようなメタ・コンピテンスの上に、ソーシャルワークの専門性が成立するという意味で、重層的構造となっている。

コンピテンスの重層的構造を、細分化することなく全体性としてとらえることが、評価で大切である。全体性としてとらえるためには、学習者である学生に実際的なパフォーマンスを行ってもらうことが前提であり、この直接的なパフォーマンス評価として近年では相談援助実習などの実習科目において、客観的臨床能力試験（The Objective Structured Clinical Examination : OSCE, 以下「OSCE」と表記する）が採用されている。OSCEの適用については、実習前の評価であっても、実習後の評価であっても有効である。OSCEが実習後の評価システムとして用いられた場合、実習について振り返りを含められる、という点において、OSCEは実習評価を細分化することなく、全体性として評価していける。それは、評価者と実習生との間で行われる振り返りが、実習にいかに関与したのかや、そこから得られた事からは何だったのかといった、実習生一人ひとりの実習目標に近づけた話し合いになっていくからである。

## 5. 考察

本報告の主旨は、わが国におけるソーシャルワーク分野のコンピテンス基盤型教育（competency-based education）の方向性と、その評価方法について明らかにすることにあつた。ソーシャルワーク分野においても、学部教育を受けた結果、何を学んだのかではなく、学部卒のソーシャルワーカーとして何ができるようになったのかを示していけることが必要である。

何ができるようになったのかというコンピテンスを示していく方向性としては、二つの点から論議される必要がある。一つは、コンピテンスを全体性として扱うという点である。この概念は、細分化されたコンピテンスを一つひとつ積み上げていくのではなく、全体性から見た評価が求められているということである。もう一つは、コンピテンスの重層構造としての理解である。どのような専門職であっても共通している、メタ・コンピテンスと専門職独自のコア・コンピテンスからなる重層構造としての理解が求められている。こうしたコンピテンスを評価していくための方法論としては、OSCEが有効である。ソーシャルワーク教育においては実習後の振り返りを含めることで、実習生一人ひとりの実習計画に沿った、実習全体の振り返りと評価を行うことができる。このことは、コンピテンスの重層構造についても評価ができることを意味している。